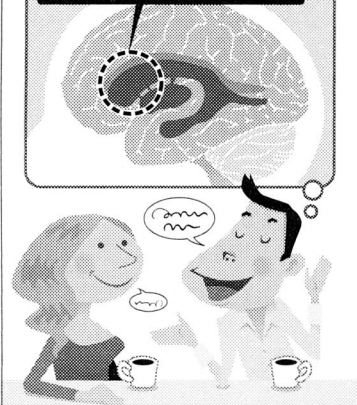


バイリンガルで活性化される脳の場所

左側の尾状核が活発に働く



発見「英語脳スイッチ」

英会話のとき、ものごとを英語で考えられるほど上達した人は、脳の特定部位が活発に働いていることを、英国と京都大などのグループが確かめた。語学を効率よく学ぶ手がかりにつながるかも知れないという。9日発行の米科学誌サイエンスで報告する。

京大など報告

ロンドン大のキャシー・ブライス博士、京大の福山秀直教授らは、英語が達者なバイリンガルのドイツ人と日本人の計35人に、文字を見て即答してもらう課題を与え、脳の活動を機能的磁気共鳴断層撮影（fMRI

バイリンガルの大脳奥で活躍

I)などで調べた。課題は例えば、パソコン画面に「マス・サケ」「子羊・鶏」などの二つの英単語を連続して示し、両者の関連性の有無を即答する。意味を頭の中で母国語に翻訳せず英語でそのまま考えないと対応できない。

課題中の様子をfMRIで見ると、大脳奥にある尾状核という場所のうち、左側が活発に働いていた。ドイツ人も同じ傾向だった。福山さんは「尾状核は『英語脳』『日本語脳』を切り替えるスイッチ役ではないか。ここが十分に成熟してから語学を学べば、使い分けがうまくできるようになるかも知れない」という。尾状核がいつごろからうまく機能するかはよく分かっておらず、今後の研究課題だという。

東京大の酒井邦嘉助教授（言語脳科学）は「尾状核を含む場所は言語機能と関係することが最近分かっている」と話している。